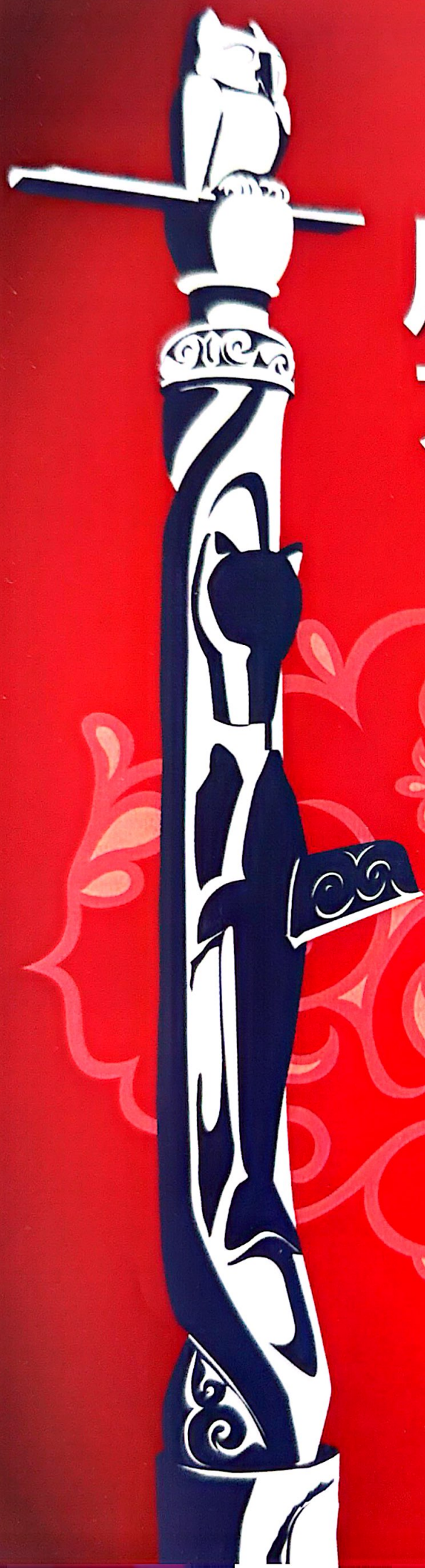




川村カ子ト アイヌ記念館

Kawamura Kaneto Aynu Museum



川村カ子トアイヌ記念館

川村カ子トアイヌ記念館



1890年（明治23年）旭川で開拓が始まり、私たちの周辺は環境も生活も激変しました。生活の基盤である鹿猟や鮭漁を禁止され、住む場所さえも変えるよう命ぜられました。石狩川近くの原野が「給与地」として私たちの開墾する土地とされました。1901年、私たちの「給与地」に隣接して日本陸軍第七師団が設置されると土地の価値が高騰して、私たちの土地を手に入れようとするものが現れましたが、先祖たちの努力でこの地にとどまることができました。

こうした背景により私たちの元へ人々が見学に訪れるようになり、アイヌを正しく伝えるために1916年川村イタキシロマが、「アイヌ文化博物館」を始めました。イタキシロマは現館長の曾祖父に当たります。2代目カ子トの時代には戦後の復興期を経て観光ブームが起こり順調でしたが、1964年に火事で全焼したのです。その後、地元アイヌの協力を得ながら、私財を投じて記念館を再建しました。三代目の時代に旧

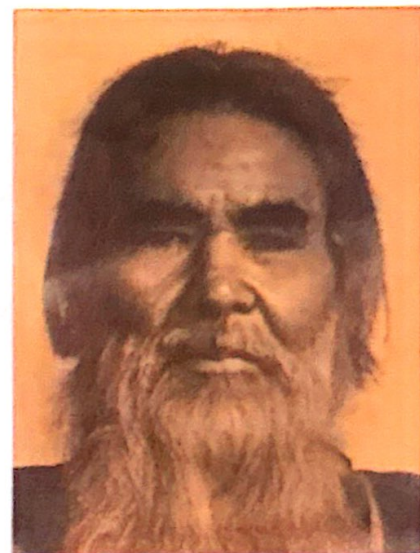


館の外観は現在のようになりました。近文アイヌ工芸センター（1961年建設）の外観を移設したもので、近文アイヌの彫刻家・砂澤ビッキ氏によるものです。記念館は少しずつ姿を変えながら、川村家によって守られてきました。

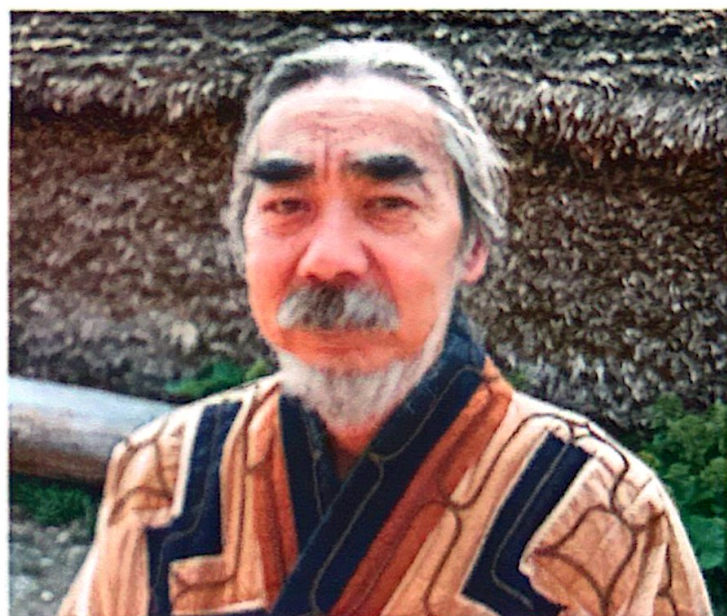
さらに未来につなぐために2023年アイヌ記念館は新しくなり、4代目館長が誕生しました。



測量に従事した
カネトアイヌ 2代目館長



博物館を始めたイタキシロマ



民族の権利獲得と伝承活動に努めた
3代目館長 シンリツエオリパックアイヌ

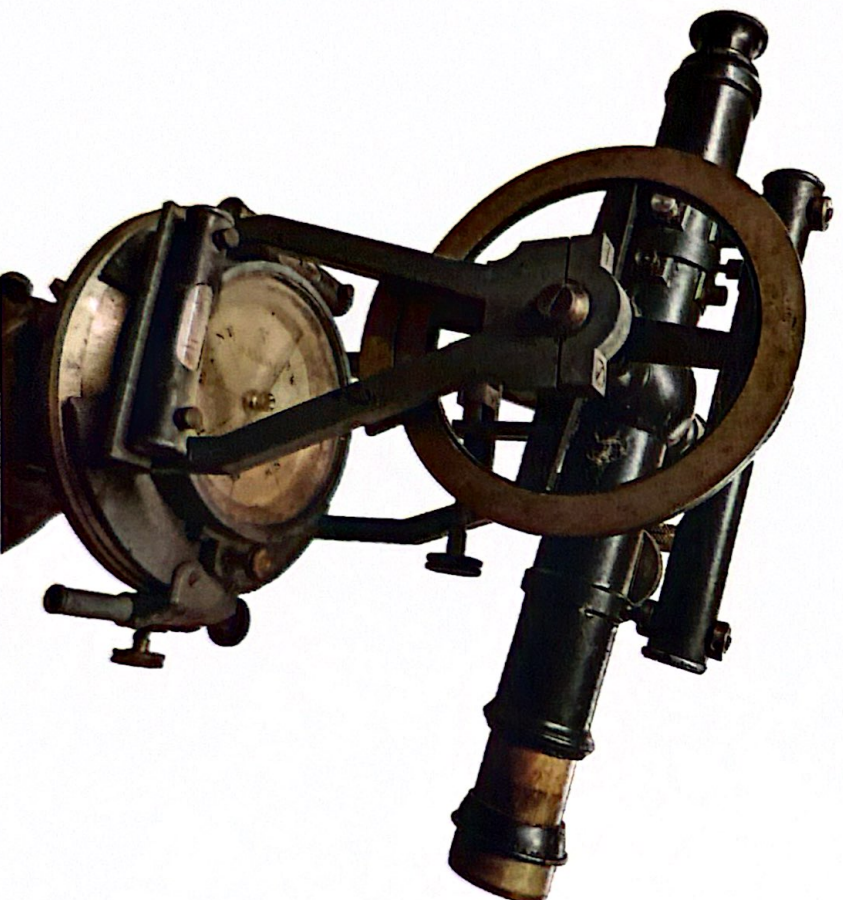


4代目館長 川村 晴道

川村 力子ト (一九三七)



川村イタキシロで、アペナンカの長男として誕生しました。現在の旭川市永山は昔キンクシベツといいました。当時の旭川のアイヌは伝統的な生活を禁止され、「給与地」は開拓に適さない土地、生きるために職業に就く必要がありました。カ子トは幼い頃から初めて目にした汽車に憧れて、15歳から鉄道敷設予定地測量工夫に従事しました。アイヌであることを理由に給料が半分にされるなどの待遇に合いながら、反骨精神を発揮し測量技術を身につけて道内各地の敷設予定地の測量を行いました。その後、長野県や樺太、朝鮮半島でも測量に従事しました。中でも、アイヌとしての身体能力の高さ、危険な場所にも怯まない勇気を評価した三信鉄道（現JR飯田線）に請われて、長野県の天竜峡～三河川合間の測量を行いました。大変な危険を伴う仕事だったため、兄弟など親族の測量隊で仕事を行いました。1926年から1932年まで長野県で、測量や工事の現場監督を行ったカ子トらの努力によって三信鉄道の難所が開通いたしました。



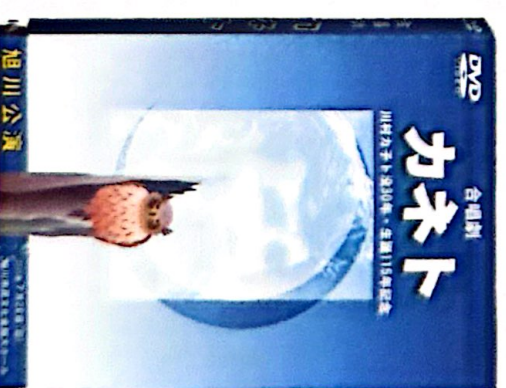
カ子トが使用した測量機器



飯田線

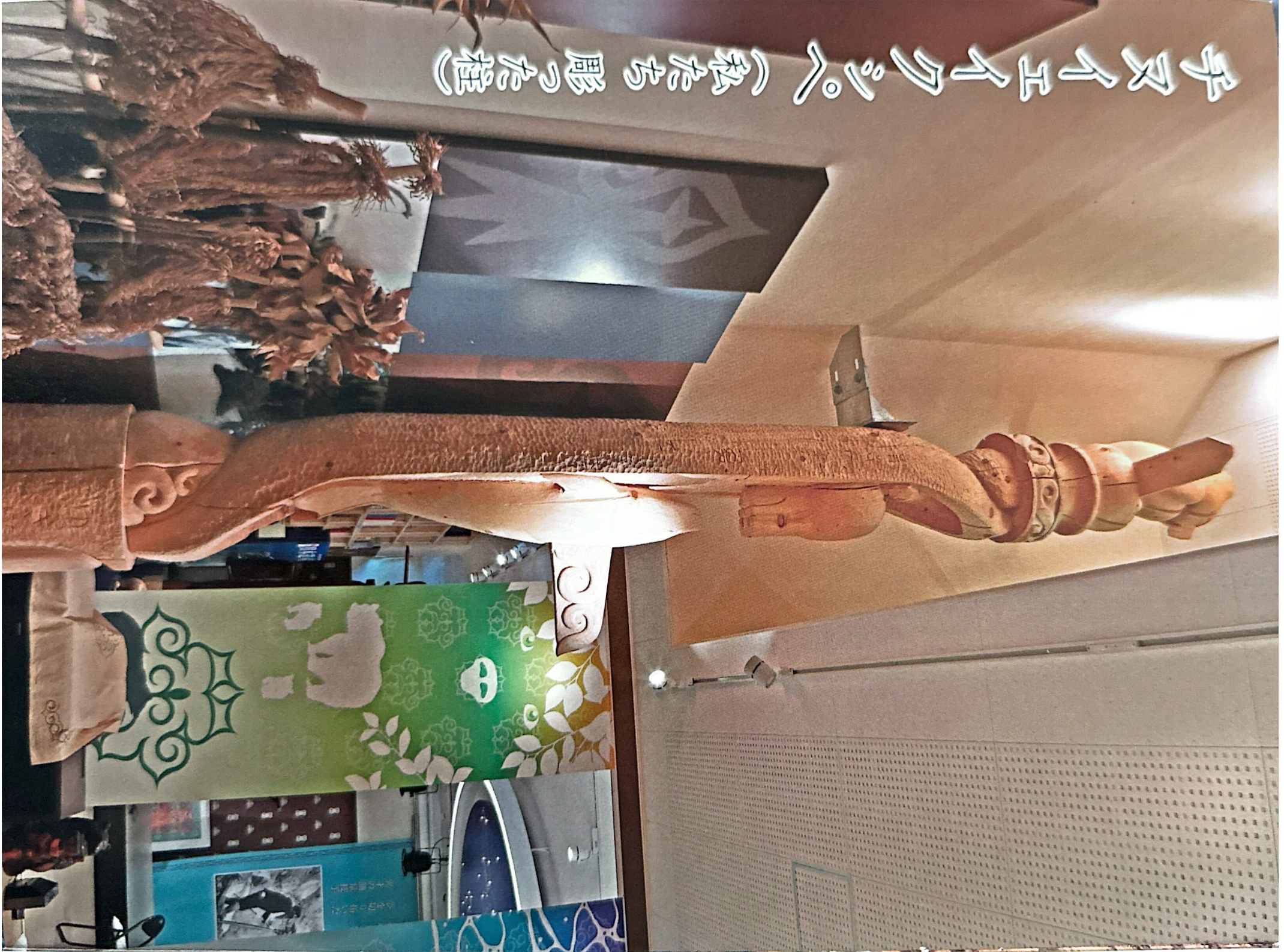


カネト・炎のアイヌ魂



合唱劇

チヌイハイグバク (秘伝の影の太極)

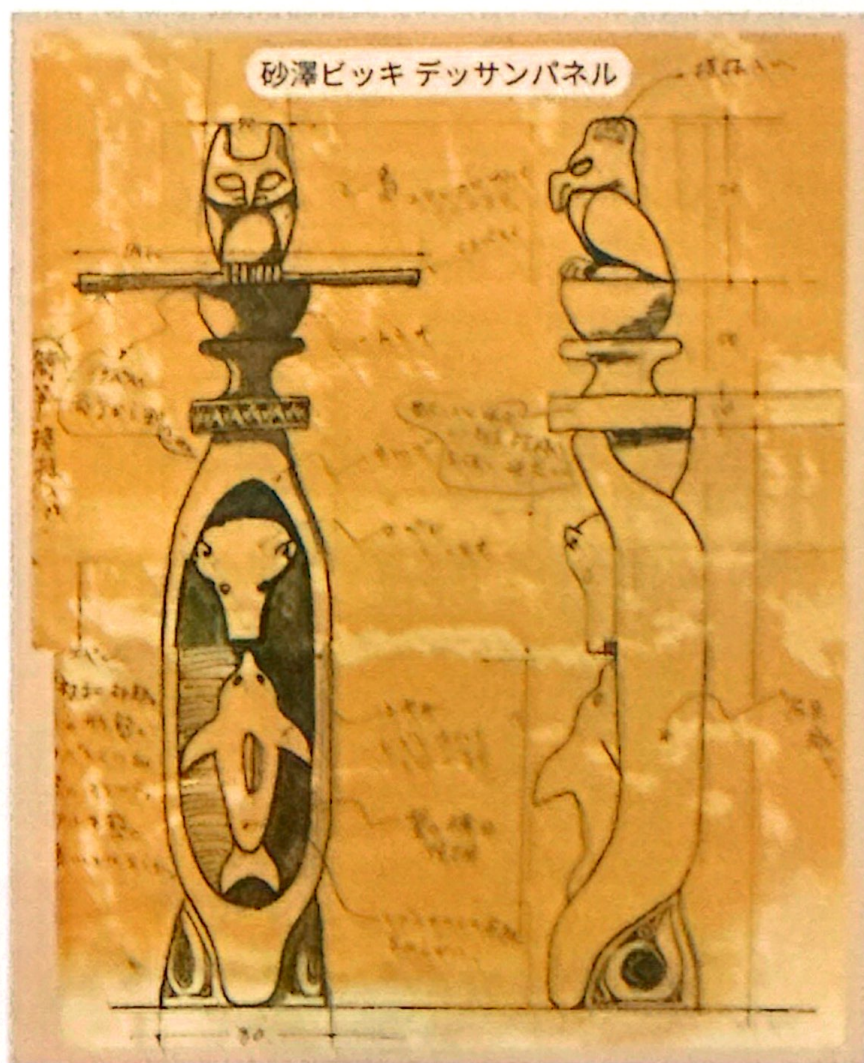




彫刻を施した柱は私たちの伝統文化ではありませんでした。先人である彫刻家の砂澤ビッキが、主導者・川村カ子トアイヌを失った私たちを励ますために、1979年に立てたのが始まりでした。屋外に立てられたその柱は威厳を備えていましたが、2004年の台風により倒壊してしまいました。2023年記念館の新館リニューアルに向けて、当代一のアイヌの彫刻家・藤戸幸夫がこれを再現しました。樹齢100年のエゾ松に施されたコタンコロカムイ（村の守り神・しまふくろう）、キムンカムイ（山の神・ひぐま）、レプンカムイ（沖の神・しゃち）が、来館者と記念館の行く末を見守ってくれています。

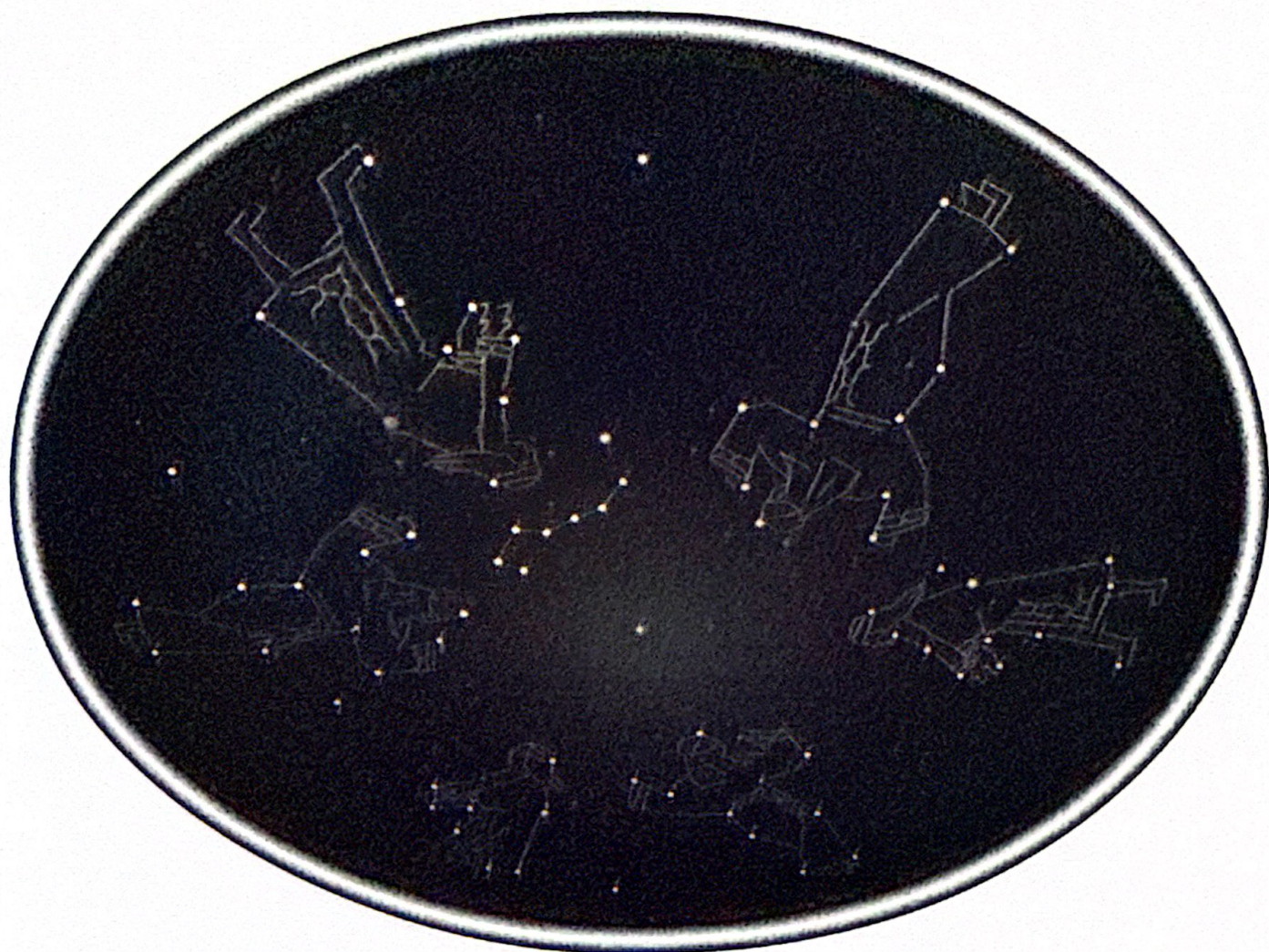


旧チヌイェイクシベ



製作風景





館内展示

いるうちに星にされた姿なのです。宵の明星（金星）のことをオヌマンノチウ（タ方の星）と呼んでいましたが、道北ではスワラノチウ（栖原の星 宵の明星）と呼ぶようになりました。これには悲しい歴史があります。江戸時代中期以降のこと、私たちの先祖は漁場での労働を強いられていました。石狩十三場所の一つトママイは特に過酷な労働で知られていました。漁場の最盛期、秋になると西の空に宵の明星が光る頃（午後9時頃）まで休むことができませんでした。家族と引き離され、命を落とすことも多かった過酷な労働に耐えた苦しみを忘れぬために名付けたのです。「スワラ（栖原）」とは、この漁場の場所請負人の名前です。



アイヌの星 旭川叢書第12巻

木彫熊



偉大な力を持つひぐまを、私たちはカムイ（神）と呼んで敬ってきました。昔は祭具以外にカムイの姿を施すことはタブーとされてきました。しかし、伝統的な生活の転換を余儀無くされた旭川のアイヌは、明治時代の終わりに「観光」を始め、生きるために土産物を作りました。いつしか若者の中から「くま」を彫る者が現れました。それは、アイヌの物つく





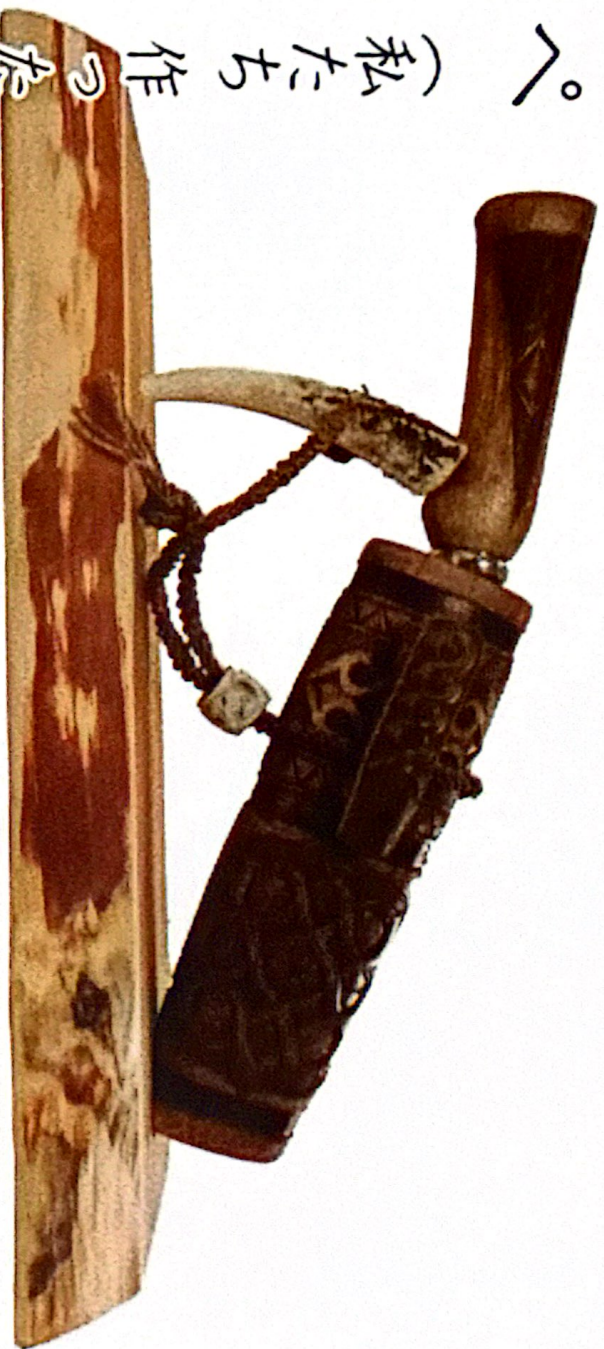
り史上最大の変化でした。隠れて作られた「くま」はいつしか代表的な土産品になりました。時代や作者によって様々なくまが彫られるようになりました。私たちにとって「物」はただの物質ではなく魂の宿ったモノなのです。もし木彫熊は家に眠っていたら大切にしてください。



清水カヨ 作



チカリ。(私たち作のもの)



ホンナタ 藤戸幸夫作



宝石箱 藤戸幸夫作

昔は身の回りの道具のほとんどを自分たちで作っていました。男性は木彫を、女性は刺繍やゴザ、バッグなどを作りました。これらは自分たちが使用するもので、各人の創意工夫や願いが込められており、決して精巧なものとは言えませんが、見るものを魅了します。日用品の他に交易が盛んな時代には交易品を、明治以降になると土産品を生産するようになりました。中でも技術の高い者もの手による芸術作品は神々しいまでの魅力を放っています。

当館の宝石箱は樹齢400年ほどのイチイの木で作られています。400年の時を生きたイチイの木は薪にされるのを待つ状態でしたが、彫刻家、藤戸幸夫氏に見出されて新たな命が吹き込まれました。藤戸氏は言います。木を知り、木に思いを巡らせ、木の声に従って削れば輝くばかりの作品が姿を表すのだと。技術はもちろんですが、心も大切なのです。



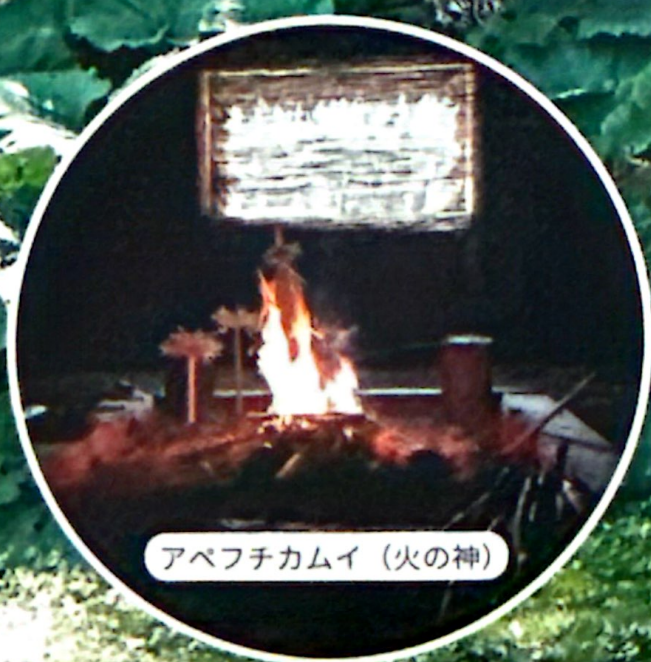
砂澤ビッキ 作「ANIMAL 一代雑種」



瀬戸竹喜 作「川村カ子ト」

ウラツチセ

(笹葺の家)



アベフチカムイ (火の神)

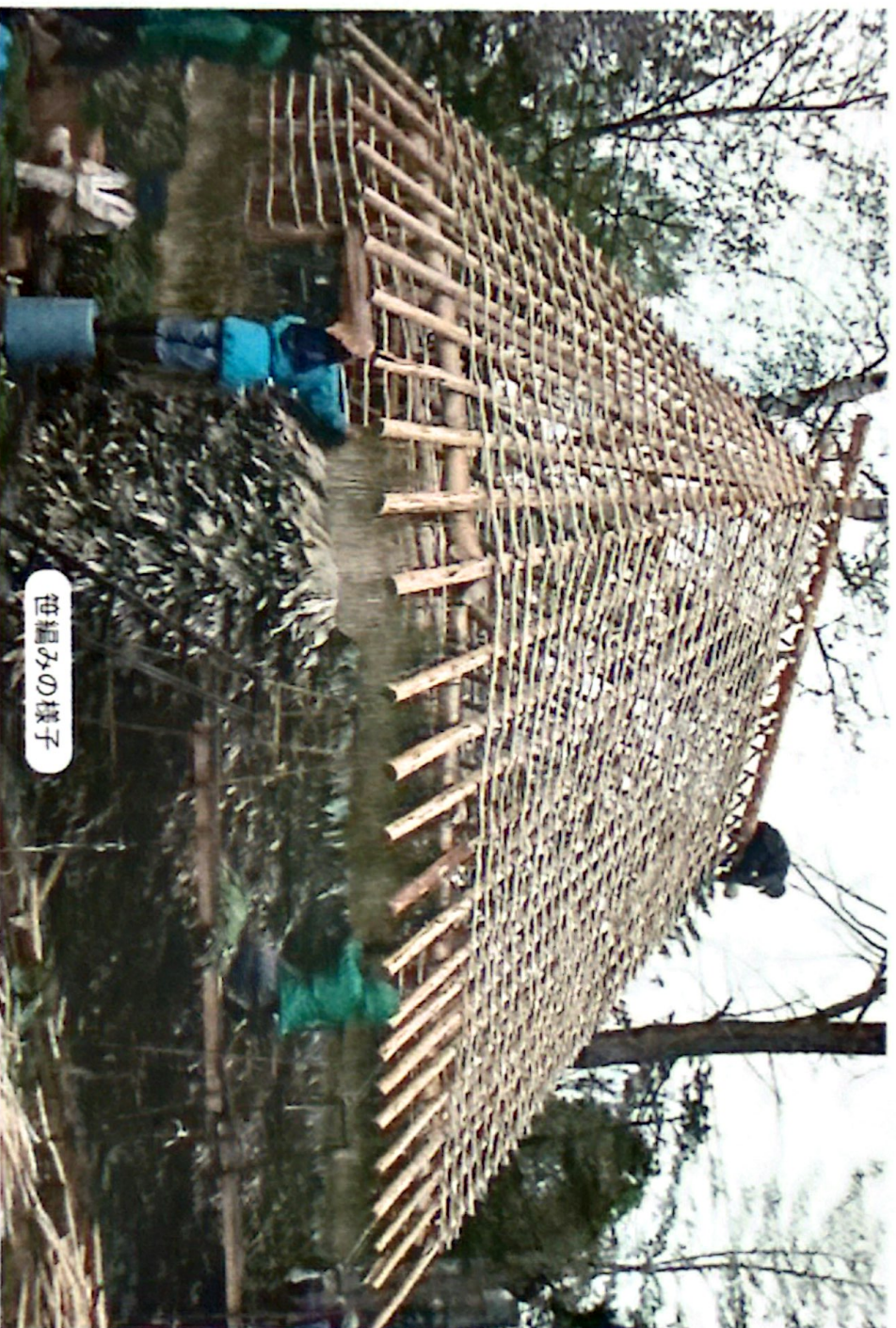
当館のチセは2005年に多くのボランティアの協力を頂いて建設致しました。2月から木材の切り出し、4月末から骨組みを作り、笹刈りと笹編みを5ヶ月かけてようやく完成しました。旭川を含む上川地方および西蝦夷と呼ばれた地域では熊笹を用いて家を作りました。家には必ず炉がありますが、火はとても大切な神様です。炉には足を踏み入れたりしてはいけません。窓は三つありますが、一番奥にあるものは神様の窓です。その外側には儀式を行う祭壇があります。当館でも毎年儀式を行っています。



集めた笹の葉を束ねる様子



屋根の骨組み



笹編みの様子



ご利用案内

開館時間 午前9:00～午後5:00

(団体料金 20名以上)

入館料	大人	800円	(600円)
	大学生	600円	(500円)
	中高生	500円	(400円)
	小学生	300円	(250円)

体験プログラム (お問い合わせ下さい)

・ムックル制作体験 (2～20名まで)	3,000円
・ムックル演奏体験 (2～50名まで)	3,000円
・ししゅう体験 (2～10名まで)	4,000円
・舞踊体験 (2～15名まで)	2,000円
・切り紙体験 (2～40名まで)	2,000円
・アイヌ料理 (5～10名まで)	4,000円
・アイヌ文化解説・ガイドなど (1グループ)	5,000円

※料金は一人当たりのお値段となっております。

※体験講習は、事前に予約が必要です。出張の講習会も行っております。

※お手持ちの衣類などへの刺繍も特注で承っております (有料)

休館日 5月～11月…無休
12月～4月…火曜日

交通案内

旭川電気軌道バス

乗車：1条7丁目から24番線

下車：アイヌ記念館前



お問い合わせ

川村カ子トアイヌ記念館

ヤウンモシリ チウベッコタン
〒070-0825 北海道 旭川市 北門町11丁目
TEL: (0166) 51-2461
FAX: (0166) 52-6518
e-mail: aynukinenkan@gmail.com



旭川市文化芸術振興基金

旭川市の文化芸術の振興のため「旭川市文化芸術振興基金」
へのご寄附をお待ちしております。



当館は川村イタキシロマが、
一九一六年に開館しました。
伝統を守り伝え、アイヌとして
現代を生きる様を感じてください。